

史料紹介

『新撰讃美歌資料集』

(神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会)

初めに「史料」とあるが、本書は紛れもなき新刊書である。

その脱稿は昨年(一九九三年)七月末で、これが当事者たちの予想を上まわる立派な本となって世に出たのは、この年もおしつまってからのことであった。神戸女学院大学讃美歌研究会の業績の第二弾「新撰讃美歌に関する研究」(第一弾は二年前の『讃美歌并楽譜』の覆刻と解説)の先陣を承って、同研究会の代表者・茂洋教授の肝煎りで編集されたこの資料集、新刊ではあるがこれを「史料」扱いしようという所以は、これが、日本の讃美歌研究史上かつて例を見たことなく、またこののちも他の追隨に甘んじることなく、以後の関連諸研究に有用な指針となるであろうという点にある。しかもこの書物は、その内容においては勿論、その上梓の次第においても、全くユニークかつ画期的な試みを具現したものと自負してはばかるところのないものと思われる。

『新撰讃美歌』の刊行は一八九〇年。組合教会と長老派教会

とが初めて共同で作ったこの讃美歌は、頌榮、讃詠文、十戒、主の祈禱、使徒信經を含め二八九の歌を収めている。これに対して掲題の資料集は、最後の三つを除く歌の全ての詞についてその典拠を求め、またその系譜―それが英文原詞をもつ翻訳であるか、我が国の創作であるか、またその歌詞の推敲の経緯はどうか―を解明し、四二七頁に及ぶ壮大なリストとして読者の眼前にくりひろげる。しかもこうして歌詞の変遷をたどるにあたって、それ以前の讃美歌集において同巧の歌にあてられた tune name が網羅され、当時の讃美歌編集者による書き込み等も附記された上、本資料集の編者・茂先生のコメントも加えられていることにより、この種の研究分野における本書の有効範囲は一層拡大され得ることと思われる。

これは、コンピューターを駆使した茂先生の熱心と奥祥子氏の誠実な援護との所産で、河北印刷株式会社の先端的電算システムに受け入れられ、担当諸氏の緻密な調整に与って、上述の如く、B五版のハード・カバー、一〇頁のまえがきをつけた堂々たる本になった。活版の粋をつくれた前作『覆刻「讃美歌并楽譜」及び「解説」』に対して、現行讃美歌の端緒となる『新撰讃美歌』の研究がこのような形で世に出たことは、何とも楽しいことのように思われる。

(若山 晴子)